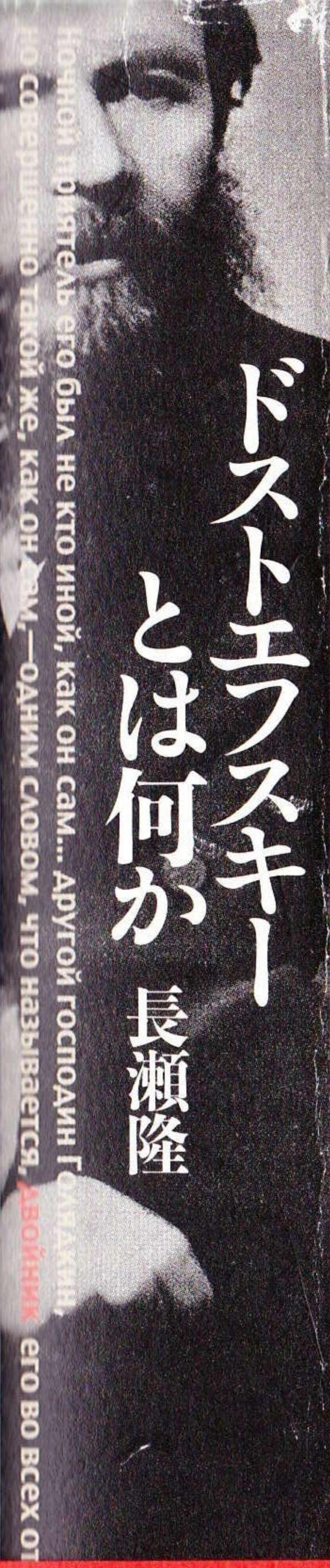


長瀬 隆

# ドストエフスキイ とは何か

長瀬 隆

「**ночной приятель его был не кто иной, как он сам... другой господин Голядкин, но совершенно такой же, как он сам,—одним словом, что называется, ДВОЙНИК его во всех отношениях.**

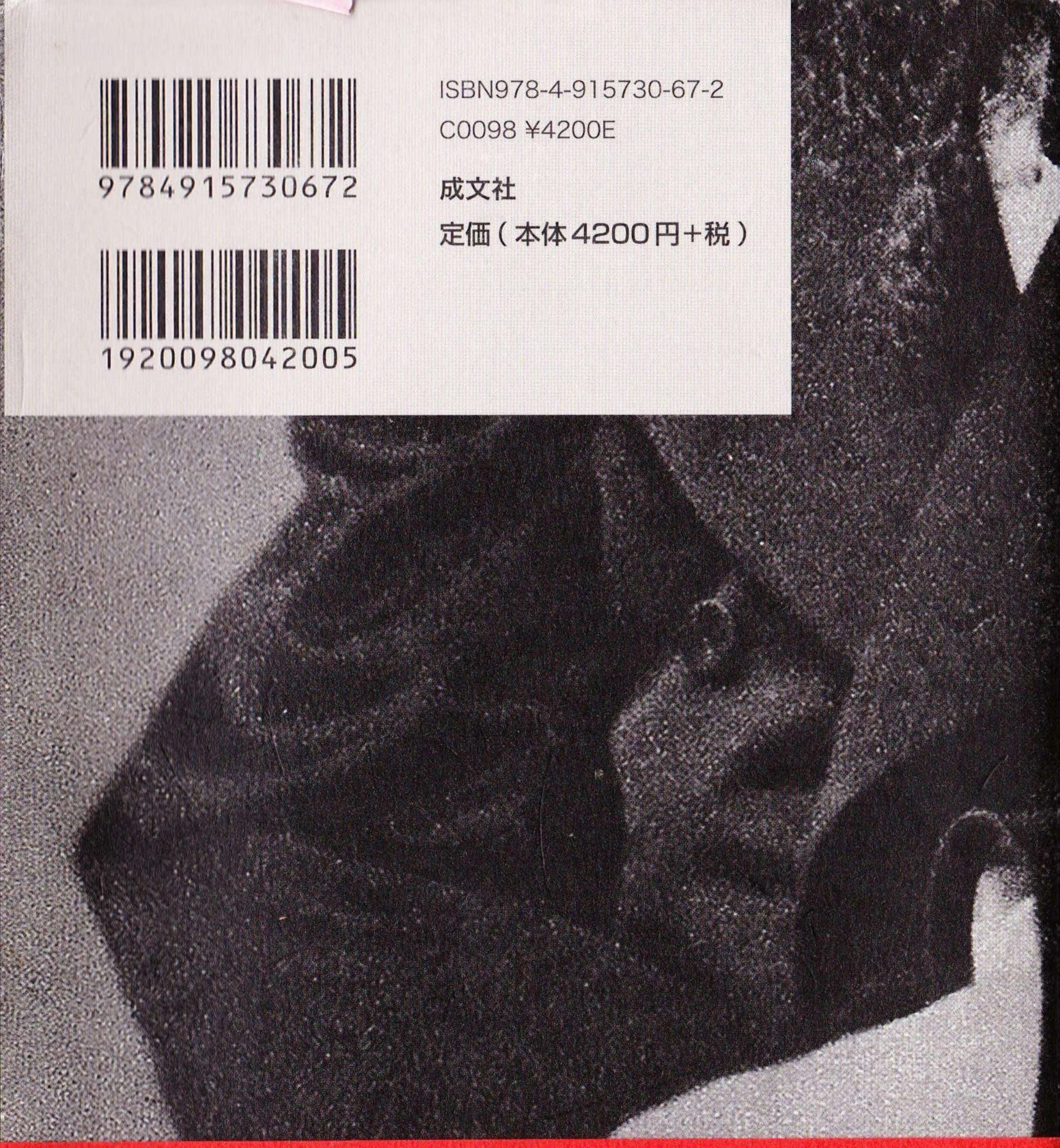


ночной приятель его был не кто иной, как он сам... другой господин Голядкин, но совершенно такой же, как он сам,—одним словом, что называется, ДВОЙНИК его во всех отношениях.

ISBN978-4-915730-67-2  
C0098 ¥4200E  
成文社  
定価(本体4200円+税)

9784915730672

1920098042005



## 二重人と分身の両義を有する

## ДВОЙНИК(ドヴォイニーケ)。

場人物たちは小市民の二重性に起因する二重人であり、二極分裂が激化すると、順な一方に我意の他方が敵対的分身として幻視される。この現象は作中作家を配置することによってのみ描きえた。だしその最初の試みには失敗、挫折する。

全作品を解明する鍵

成文社

成文社

27年後、この語は『未成年』において15回にわたって再登場、「精神的変調の兆し」と定義される。

これにより「カラマーゾフの兄弟」への道が開け、「悪魔。イワンの悪夢」の章において唯一絶対神の有無を問う西欧精神の極限の描出がなされる。

その現代的・世界的意味は、仏教に淵源する苦肉の邦訳語——分身に明らかである。

## 序 チエーホフと比較する

### 1 キーワードは両義語 ДВОЙНИК ドヴォイニーケ（二重人＝分身）

初期作品の人物はすべて小市民——二重人はその存在形態にして精神。第二作の表題は「その名もずばり『二重人ドヴォイニーケ』。処女作の最初の二重人女性ワルワーラ。分身ドヴォイニーケを描くための必要として登場した語り手「私」。第二作の失敗と挫折。二十七年後、分身ドヴォイニーケは『未成年』において再登場、この語の定義がなされる。評論『動詞ストウシエヴァーツアの歴史』での第二作失敗の確認と分析。『カラマーザフの兄弟』への道。

### 2 ゴーゴリの遺産——ドストエフスキイの相続

ロシア文学に特有の語り手「私」の誕生。ブーシキンからゴーゴリへ。『死せる魂』のドゥーシ（農奴、魂）の両義性とそれによる作品の大成功——ドストエフスキイ、これを『二重人』においてドヴォイニーケを用いて模倣、大失敗する。ゴーゴリ『作家の告白』——「自分の内面世界の密室」。混迷の作家活動とペトラシェーフスキイ会への参加。ツアーリズム批判の非合法文書、ベリンスキイの『ゴーゴリへの手紙』を朗読、密告により逮捕、死罪判決の後、減刑、シベリアに流刑さる。日本におけるドストエフスキイ、『悪霊』をめ

ぐる古在由重と丸山真男。「転向」とシエストフ受容についての松尾隆（木寺黎二）と埴谷雄高。

### 3 流刑までとその後

客観的分析を欠いたシエストフの『悲劇の哲学——ドストエフスキイとニーチェ』。流刑後の第一作『ステパンチコヴォ村とその住人』——喜劇仕立てに秘められた屈辱と忍従。貴族の衣装をまとった最初の仮装人物——ロスター・ネフ。執筆できなかつた己を戯画化したオビースキン。『死の家の記録』の静謐——「死からの復活」の確認。

第二の処女作『虐げられた人々』。最初の我意のイデオロギー——ワルコーフスキイ。二重性把握におけるペレヴエルゼフとジラール——一致と相違。『地下からの手記』の語りの二重構造。『石の壁』は帝政を暗示する。地下人は哲学するゴリヤートキン。

### 4 キリスト教の登場——『罪と罰』

666についての江川卓説の誤謬——ラスコーリニコフはアンチ・キリストではない。マルクスの天才的默示録解説——獸は貨幣そして竜は商品。默示録と福音書はどちらが先に書かれたか。默示録と福音書の分裂についてのロレンスの卓見。ラスコーリニコフは默示録派、ソーニヤ・マルメラードヴァは福音書派。評論「\*\*ボフ氏と芸術の問題」。ペレヴエルゼ

フ『ドストエフスキイの創造』（一九一二）の意義と不完全——「スタヴローギンの告白」の存在を知らずに執筆されている。

5

## 仮装人物の出現と作中作家の進化——『白痴』

都市の小市民を描くための独自な文体。貴族地主階級を描く必要——彼らだけが文化を所有していた。小市民に貴族地主の衣装をまとわせた人工的上流人士の像——ムイシキン。先駆形は『検察官』のフレスタコーフ——通過してゆくだけの存在。そのなかに作者の個人的思想は書き込むための仮装人物||芸術的装置||虚体。男女三人で暮らす夢——『永遠の良人』の例。検閲への配慮——恐怖の死罪体験を「白痴」に語らせる。語り手の「私」はドストエフスキイであつてドストエフスキイではない。温順な人——ソーニヤ・マルメラードヴァとムイシキンの同質性。濃厚に現れている金銭問題と默示録。必要不可欠なマルクスへの立寄り。

6

## 唯一絶対神はどうして発生したか——マルクスの默示録解説

『資本論』に掲げられた默示録の一節——「彼らは心を一つにして、おのが力と権威を獸にあたえる。この印をもつもの、或いは獸の名をもつものを除いては、買うことも売ることも誰にもできないようにした。その印は、その獸の名、またはその名の数字である」。

平田清明氏の業績。貨幣の空間的普遍性と時間的永遠性。人間の意識における、普遍・永遠・唯一者・無限・全知全能の觀念の発生——これこそが唯一絶対神の起原である。抽象的人間。疎外 *Entfremdung* とは何か。

7

## エンゲルスとロレンスのキリスト教観および『白痴』（続）

「ドストエフスキイ默示録」（ジラール）という賞賛は可能か？そもそも默示録は何を默示しているのか？欲望についてのマルクス。ロレンスのアポカリップス（默示録）論。福音書の成立は默示録よりもはるかに後年、キリスト教がローマの国教となつて後——エンゲルス「ブルー・バウアーと原始キリスト教」。キリストが救世主とされた經濟（学）的理由。キリスト教の発生と成立についてこのうえもなく明快な別証——エンゲルスの思想的遺書「原始キリスト教の歴史によせて」。默示録は金銭と権力について語つており、ラスコーリニコフにとつて、打倒されるべき「淫乱の都バビロン」がロシアでは帝政であることは自明だつた。

再び『白痴』——默示録がユダヤの暗号で書かれた秘密文書であつたように、イソップの寓意が語られている作品。ムイシキンは白痴と性不能者を演技している。癱瘓についての告白。ムイシキンに存在した芸術創造の意志——「美は世界を救う」。反逆した狂女——ナスター・シャ・フイリッポーヴナの死——その美。

ペレヴエルゼフの「『悪靈』論」——「ドストエフスキイと革命」(一九二二)。『悪靈』のなかの二つの時間——作中作家アントン・ゲーの語りの構造。ピヨートル・ヴエルホヴエンスキーの原型は『死の家』の殺人囚ピヨートル——その手前勝手な「自由、平等、友愛」。帝政のイデオロギーがロシア正教であることを見定めたキリーロフ——それへの反逆と否定である我意の主張。革命一揆ではなく神を選び、それゆえに組織を離脱して処刑される哀れなシャーテフ。これらの人物に比較するとスタヴローギンは不明確であり、矛盾し分裂している。彼は『死せる魂』のチチコフであり、同様に芸術的装置=虚体である。芸術家が住む非在の空間としての『白夜』の「片隅」→「死の家」→「地下」。そしていまや「虚体である芸術家」が人物として登場した。

スタヴローギンは己の「分身(幻視)現象」についてドヴォイニーエクの語を使用せずに語る——「神を信じないで、悪魔を信ずることができるものでしょうか」。死に臨んでのステパン・トロフィモヴィチの回心——『ドン・キホーテ』の結末との一致(ジラール説)。スタヴローギンの肖像——サルバドール・ダリの「磔刑(超立方体的人体)」の四次元以上の絵画に似る。スタヴローギンはアントンの対立的分身、したがつてその関係は——スタヴローギン+アントン・ゲー=ドストエフスキイ。

## 9

## ドヴォイニーエク(二重人、分身)とは何か?——『未成年』

『未成年』が軽視されてきた理由——ドヴォイニーエクの重要性に気付かぬ者の短見。初めての父子関係追求の作品。地主貴族と農奴の血をひく二重人=私生児の語り手、未成年アルカージーによる、貴族の父ヴエルシーロフの謎解きの物語。偉大な教養人ヴエルシーロフは、作家に成れなかつた場合の現在のドストエフスキイ。アルカージーは作家に成つていつた若き日のドストエフスキイ。

貴族階級への憧れと反感、すなわち二重性。貴族のアフマーコヴァ夫人への思慕による躊躇——しかし彼は書くことによつてそれを抑制し克服する。法律上では父にして母ソフィアの夫であるマカーロフ老人の帰還と死。ヴエルシーロフは今やソフィアと結婚せざるをえなくなつた。しかし恋いこがれていたアフマーコヴァが結婚することになつて、ヴエルシーロフは自己分裂をきたし、恥も外聞もなくなつて彼女に愁訴する。ヴエルシーロフの描写の『白夜』の夢想家との酷似、彼の精神は貴族ではない、小市民が貴族の衣装を着てゐるにすぎない。

そしてついに「わたしは自分がほんとうに二つに割れてゆくような気がするんですよ。まったく精神的に分裂していくんです。自分のそばにドヴォイニーエクが立つているような具合なんだ」と口走り、マカルから贈られた聖像を真つ二つに割る。ドヴォイニーエクのなせるわざとされる。彼は崩壊し、ソフィアの介護・管理下にはいる。

ヴエルシーロフが生涯ドヴォイニーエクに苦しめられ、何ものをも創造できなかつたのにたい

し、未成年の息子はうちなる農奴の血に支えられ、一編の「習作」的記録を完成した。それはモスクワの育ての親に送られ、その講評が掲げられてエピローグの章となる。かくて「未成年」は『未成年』となつて完結する。

「時代はつねに未成年によつて築きあげられるのですから……」と結ばれる講評は、それ自体がドストエフスキイによる己の文学の批評。ツルゲーネフやトルストイら貴族の作家たちとは異なつて、彼は自分が小市民の作家であつたことを自認し誇つている。これに続く評論「動詞ストウシェヴァーツアの歴史」はこの補注。

## 唯一絶対神は有るか無いか——『カラマーゾフの兄弟』(1)

「性悪な作家」——第二部の意図は最初から無かつた。二重人の主題がボリフォニーを結果したのである。ドストエフスキイの神はユダヤ＝キリスト教の唯一絶対神——「わが国の精神風土とは無縁の神」(寺田透)。初めての挑戦——兄弟、そしてロシアの未来、すなわち子供たちの問題。現『カラマーゾフ』の主人公は——問題提起者であるイワン。ゾシマ長老は「スタヴローゲンの告白」のチーホン主教の再(?)登場。ロシア人の救いがたい幅の広さ——「そこでは悪魔と神が戦つてゐる。その戦場が——他ならぬ人間の心だ」(ドミートリー)。ドストエフスキイは唯一絶対神の発生の原因を問わなかつた。ラスコーリニコフ同様にイワンは最後の審判まで待てない——「その入場券は高すぎるから、返す」。「報應など當てにせずに死んだキリストを想起せよ」(アレクセイ)。

かくてイワン作の『大審問官』——マタイ福音書第四章の「荒野での『試し』」。高度な神学論議の父殺しと絡みあつての展開。大審問官のキリスト批判には美が欠けており、しかし黙つてその手に接吻するキリストには美がある。福音書のプロパガンダ小説? ゾシマは父殺しを予見しており、アレクセイに遺言して最後の法話をを行い、死去。遺体から異常に強い腐臭が発し、彼は動搖し、その事実を認めまいとし、イワンの言葉を復唱する——「僕は自分の神に謀反を起こしていない。ただ『神の世界を認めない』だけだ」。「ガラリヤのカナ」の夢——アレクセイの神秘体験。

貧しく不幸なイリューシャ少年と革命的なクラーソトキン少年。

## 父殺しと帝政——『カラマーゾフの兄弟』(2)

イワンは思想家に成長したゴリヤートキン——悪魔はその分身、すなわち第二のゴリヤートキン。語り手「私」がこのジエントルマン＝悪魔に変身する——温順と我意の二極分裂のもつとも激烈な形態としての分身現象は、ただこの手法によつてのみ描きた。悪魔を欠いては真の芸術は無い——「批判がなければ、『ホサナ』(神の讃美)だけになつてしまふ。しかし人生は『ホサナ』だけじゃ足りない、この『ホサナ』が懷疑を乗り越える必要がある」(悪魔の主張)。イワンは『大審問官』制作によつて芸術家を目指していた——悪魔はそれを失敗作として嘲笑、彼は最終的に崩壊する。

「神が無ければすべてが許されている」とするイワンのテーゼの眞の意味は当時のロシア国

歌「神よ、皇帝を守りたまえ」に見えていた。神を無しとすることは、帝政と一体の聖務院（シノド）への反逆、事実上の帝政への反逆であつた。裁判の場面に移つて事件が全ロシアの注目を集めたとされるのは、これを念頭に置いてのこと。検事の論告には処刑台の体験が云々されているが、結局は真犯人がスメルジャコーフであることを見抜けぬ者の言。対するに、それを見抜いたアレクセイの証言を支持した弁護人の、殺されて当然とする「悪しき父親」批判。処女作いらい社会的階級的意味合いで二重性の追求に努めてきたドストエフスキイは、死罪体験を契機に変貌し、『白痴』以降神の有無の問題に集中、『カラマーゾフ』に至つて全開する。そしてついにアリョーシャはイワンをもつとも重い犯人と見なして言う、「僕は兄さんにそう言うために、神様からつかわされて来たのです」。真正なキリストを提示することによつて、帝政と貴族地主階級を撃つと同時に、一揆主義的形態でしか存在しなかつた無神論の革命派をも撃つ——これがドストエフスキイの到達点。

## 12

### 全西欧精神解明の鍵——分身という邦訳仏教語

「いかなる日本といえども、いかなる中国といえども、ヨーロッパの詮索心にとつてロシアほど神秘のヴェールに覆われてはいない」。見下されているアジア——「ヨーロッパでわれらは奴隸、アジアでは主人、アジアは出口」。日露戦争とロシア革命、コミンテルンと日本、いわゆる「転向」と戦争の結果としてのドストエフスキイ受容。

ルネッサンス以降の西欧の思想原理——「神は死んだ、神の地位をうけつぐのは人間だ」（ジ

ラール）。ドストエフスキイ自身それを自覚していた——「Je pense, donc je suis.（われ思う、ゆえにわれ在り）、これは僕にも分つてゐる」（「悪魔」の言葉）。マルクスの宗教止揚の試み——アウシエヴィツの予感。第一次世界大戦後のロレンスはユダヤ＝キリスト教を否定し、非西欧との連帶を求める。最後に「まず日輪と共に始めよ、そうすればほかのことは徐々に、徐々に繼起してくるであろう」と結ぶが、それは空海の大日如来の思想に通じる。第二次世界大戦後のジラールは逆——キリスト教なしにはやつてはゆけない西欧——『カラマーゾフ』の兄弟』はそのことを説いており、聖アウグスティヌスやダンテにつながる最高の西欧文学——すなわち「ドストエフスキイ默示録」。しかし客観的な意味合いにおいてドストエフスキイが默示するのはそうしたことではない。

すべてのヨーロッパの言語はдвойник ドヴォイニークに對応する一語を有し、仏語ではdoubleと訳されている。ロシア人もフランス人もこの語の両義性に矛盾を感じないが、邦訳者たちは苦労してきた。

問題はかかつてこの一語の両義性に存する。同年パリ刊のフーコー『言葉と物』におけるdoubleの氾濫。ヘーゲルの『対自フコール・ジッヒ』にたいする『即自アン・ジッヒ』、マルクスの「疎外された人間」等々がdoubleで一括されている事実。двойник=doubleは西欧思想の本質を現わす一語なのである。ここにドストエフスキイの貢献があり、そしてその邦訳語が米川正夫により「分身」が当てられたことの現代的・世界的な意味がある。分身は釈尊の微粒子を現わすサンスクリット語からの漢訳語フンジンに由來し、法華経見宝塔品に多く

の用例を見出す。したがつてこの分身という言葉がドストエフスキーを、はたまた全西欧を照らし出す。

13

### 補足と結語——現代日本の視点から

松尾隆<sup>1</sup>木寺黎二<sup>2</sup>——ドストエフスキーハ学者<sup>3</sup>マルクス主義<sup>4</sup>平和運動家。ドストエフスキートアインシュタイン。「全宇宙が、いやもつと広く言えば——全実存が、ユーダイリッド幾何学にだけもとづいて創造されたということになれば」(イワン)——「事物の世界の本質はこの世で捉えることはできぬ。他の神秘なる世界との接触感があればこそであつて、もし人間の内部にあるこの感情が衰えるか滅びるかしたならば」(ゾシマ)。ユーダイリッドを超えた異(多)次元の世界——芸術的靈感が訪れる場。空海のアインシュタインとの一致。わが創作活動——樺太のヒロシマの子。<sup>5</sup>ボイニク=doubleの非合理と唯一絶対神の非合理的の一致。

索引 (1、人名 2、事項および作中人物)

446

422

ドストエフスキートとは何か